

ロンパ倶楽部

謎解き

ファイル



森 晶磨

Akimaro Mori

絵 アルセチカ

先生は無限

ドッペルゲンガー!?

登場人物紹介……………4



プロローグ……………6



第一章 ドローンで尾行する……………9

第二章 ロンパ倶楽部への招待……………44

第三章 うさぴよんからのメッセージ……………76

第四章 そして依頼人ができた……………106

第五章 十人の木村……………137

第六章 ゲームメイカー……………163

第七章 探偵は関係者を集める……………188

エピローグ……………214





木村先生

蒼太たちのクラス担任。
プリントの木村——
略して「プリムラ」と
呼ばれている。



屋坂ひなの

クラスの
二大美女の一人。
蒼太にプリムラの
調査を依頼する。



真殿ひいる

クラスの
二大美女の一人。
毎年クラス委員長を
務めている。



飯島先生

ロンパ倶楽部の顧問。

守破リナ
ロンパ倶楽部の
創設者、兼、部長。
クラスでちょっと
浮いている。

黒木遊歩
新学期に蒼太の
クラスにやってきた
ミステリアスな転校生。

龍村蒼太
パソコンが得意な
小学5年生。
ドローン操縦が趣味。



プロローグ

小学五年の春、ぼくは名探偵と出会った。

きっかけは、担任教師・木村陵介が「増え続ける」という怪奇現象が起こったこと。こう言っても、何のことかわからないよね。

でも本当なんだ。本当に、木村は増え続けた。

ドッペルゲンガーってわかるかな。自分の分身が現れるやつ。でも木村のドッペルゲンガーは一人じゃなかった。何人も、同時にいろんな場所に現れるようになった。

その謎にぼくは巻き込まれ、解決しなければならぬ立場に追いやられていた。

名探偵と出会ったのは、そんなさなかのこと。

ああ自己紹介がまだだったね。ぼくの名前は龍村蒼太。男子からは〈龍村〉と呼ばれてる。あだ名はなし。女子もみんな〈龍村くん〉かな。

自分で言っててつまんないなと思うよ。

まあそもそもそんなに仲のいい子がいないから、あだ名で呼んでくれないんだな。

性格は弱気な平和主義。趣味はゲームとユーチューブ。

でもスマホばかり見てると外で遊んでこいつで怒られるから、ミニドローンを作つて飛ばしたりもしてる。

最近ハマってるのはユーチューブの科学系チャンネル。怪しい都市伝説っぽい噂を科学的に解明してくれるのを見ていると胸がスカッとして気持ちいいんだよね。大人って堂々とどこかで借りてきた理屈をわが物顔で使ってるけど、よく「それ誰のロシリですか？」って思っているから。

まあとにかく、これはそんなぼく、龍村蒼太が小学五年になって最初に体験した、世にも不可思議な出来事についてのお話。

その一部始終を記録しておこうってことで、ぼくがこういう形にまとめる。

大好きなパソコンを使つてね。

これから、このはじめから終わりまでを、順を追って話していかうと思う。
算数の途中式を書くように、できるだけいいねいに、順番どおりに。

第一章 ドローンで尾行する

1

この世でいちばん最悪な日って何か知ってる？

ぼくは知ってるよ。もちろん。間違いない。これ以外ないってやつ。

それは、長期休暇明けの学校初日だ。

春休みでも夏休みでも冬休みでも、とにかく長い休みが終わった後にやってくる、「はい気持ち切り替えましょーね」っていうあの日以外ないでしょ。

でさ、まあ今日がその日に当たるんだな。

うわあ、最悪。もう朝からママに「熱があるから休んでもいい？」って聞いたくらいイヤだった。本当は家でこもってマイクラの続きをやっていたかったのに。

ちなみに「熱がある」っていうのはホント。

36度6分。平熱だけど、ちゃんと熱はあるよ。ウソじゃないからそう電話してよってたのんだけど、ママのほうが一枚上手だった。

「いいわよ。で、先生から『何度あるんですか？』って聞かれたら、もちろん36度6分と答えるわね」

こう言われては行かざるを得ない。ぼくの負けだ。

情けないけど、負けは負けだ。受け止めないとね。

仕方なく、ぼくは登校することにした。いつもより十分遅く。

その十分でスマホで大好きなゲーム配信ユーチューバーの動画なんかを見て、気持ちを整えたんだ。大人はサウナとかに通って「ととのう」らしいんだけど、ぼくはユーチューブをみて整えた。

ゲーム配信者がマイクラとかロブロックスとかの、ユーザーが作ったルールのわからない世界でしゃべくりながら少しずつそのルールを理解してゲームを進めていくのを見てい

ると、ホッとする。

小学校つて場所も、言ってみれば、よくわからないルールで勝手に進んでく「理不尽ゲーム」じゃない？ 朝礼のあいだ立って話を聞くとか、みんなで歌いたくもない校歌を歌わされるとか。だから、そういうゲームに共感するんだろうね。

とにかく、今日は休み明けの始業式。四月六日。日本全国最悪な日トーナメントでも、確実に決勝に行ける日だよ。とくに、新担任が評判のわるい教師になったりした日は、もう確実に優勝だろう。

ぼくのクラス五年三組の担任が、宿題を大量に出すあの「プリントの木村」になったと発表された瞬間、体育館内がざわめいたくらいだった。

「はい、静かに！ 静かにしなさい！」

壇上で、担任教師を発表している教頭先生が叫ぶ。

教頭はただでさえキツネっぽい雰囲気があるんだけど、クマみたいに大きな体の校長の横に並ぶとよけいにキツネっぽさが際立つんだよね。他人の権力を借りて威張っている感じが。

「まったく、あなたたちときたら、始業式からしてざわざわざわと落ち着きがない。

まるで動物園です。ここは動物園ですか？」

キツネがいるから、そうかもしれない、とぼくは思った。
もちろん、何も言わなかったけどね。

「とくに新五年生の皆さん。あなた方は上級生という自覚が足りませんね。担任教師の発表でいまのような声を上げることが、どれほどみっともないことか、そんなことも想像がつかないのでしょうか。やれやれ、先が思いやられます」

キツネを思わせるつり上がった目がぼくたちをにらみつけた。

「教頭先生のおっしゃるとおりだぞ！」

ニヤニヤ笑いながら、たつたいま紹介された教師・木村が言う。

「だいたい、おまえたちが騒いだところで、いままら担任が替わるわけじゃないんだ。あきらめるんだな。よかつたじゃないか。大当たりだ」

その言葉で教師たちが笑い出した。大人の笑いつてイヤだ。ぜんぜん子どもの心を見捨ててるから。

まあね、世の中、イヤなことなんてごまんとあるさ。少しイヤな目にあつたからつていちいちなげくのは、ゲームで見慣れないモンスターにビビるくらいダサイよね。

でも、これはそういうのとはちがう。

プリントの木村——通称プリムラは、本当にかなりヤバいんだ。

教室に移動し終えると、プリムラは黒縁眼鏡の奥から細い目で全体を見回しながらフンと鼻を鳴らした。歩くたびに、毛の本数に限りがあるチリチリの天然パーマがゆさゆさと揺れる。

それからニタリと笑う。

「めでたいなあ、おまえたち。もつとうれしそうな顔をしたらどうだ？ はっはっは。なにしろ、俺のクラスになつたんだからな。ツイてるぞ？」

どこがだよ？

大凶引いたようなもんじゃん。

みんなそう言いたいのをグツとこらえているのがわかった。

うちの学年は三クラスしかないから、今回のクラスのメンバーも大抵一度は同じクラスになつたことのあるやつばかり。だから、みんなが何を考えているのかはだいたいわかる。プリムラの伝説はもう何年も前から学校中に知れ渡っているからね。

でもそんなことおかまいなしにプリムラは続けた。

「それで、だ。俺が担任ってことは、つまりこの教室内では俺の決まりはぜったいってことだから、そのところは覚悟しておいてくれよ？　がつはつはつは」

シーン。
ギャグなのか本気なのかわからない。なにしろプリムラは見た目からしてちよつといかつい。理科の教師なのに、腕つぶしは柔道選手みたいに太いし、身長だって教室に入るときに身をかがめないとドアにぶつかるくらいデカい。

ちゃんと自分の外見を考えたうえでギャグを言っただけ。これじゃただの独裁者の台詞だし、実際そういうところもあるのは噂で聞いている。

みんなの言うところをまとめると、どうも彼はムジュンした論理の教師らしいんだ。ムジュンっていうのは、簡単にいえば両方が同時に成り立たないようなことを主張すること。たとえば、プリムラは「給食はぜったいに残すなよ」って言っらしい。どんなに時間をかけてでもぜったいに残すなって。

だけど、同時に、「一時を過ぎてもまだ給食を食べてちゃダメだ」って言っわけ。

ね？　おかしいでしょ。そのふたつは成り立たないじゃん？

これもほかの学年の子に聞いたんだけど、宿題を大量に出しながら「おまえらは遊ばな

いからダメだ」と言ったり、正直に言えと言うから、学校の壁に落書きしたことを打ち明けたらげんこつされた上に親に報告された、とか。

どれもこれもおかしい話だよ。もつと遊べと言うなら、宿題の量は減らさなきゃおかしいし、正直に言えと言うなら、親に告げ口しないでほしいよね。

つまりロンリムジュンしてる。それがプリムラだ。

「それじゃあ落ち着いたところで、転校生を紹介しようかな。さつき始業式の壇上で紹介もあつたと思うが――」

始業式では八人の転校生の紹介があつた。そのうち三人が小学五年だった。

まあぼくはあんまり人に興味がないから、誰がうちのクラスにこようとどうでもいいんだけど。

「おい、入っただけで」

呼ばれて、廊下で待たされていた転校生が入ってきた。

「黒木遊歩くんくろきゆうほだ。みんな仲良くしてやってくれ」

黒木遊歩は、体格の小さな男の子だった。

「きやあああ、イケメン！」



教室のあちこちで女子たちの悲鳴めいた声が起こる。

まあそれもわかる、かなり美男子だもんね。

でも驚いたのは、男子からさえも「おお……」と声が起こったこと。つまり、ちよつと男子でもドキつとしちゃうくらいのイケメンだった。

切れ長な目、高い鼻、人の秘密はぜつたいに守りそうにきゅつと閉じられた口、背は低めだけど運動はできそう。

髪はボサマツシユウルフで、寝起きでそのまま出てきた感じの自然な仕上がり。

そして白シャツに黒の短パン。

育ちのよさそうなサスペンダー付き。

でも、そういう外見よりも、中から出てくるオーラっていうのかな、それが何とも不思議な説得力があった。

なんか、タダモノじゃないって感じ？

「黒木遊歩です。どうぞよろしく」

彼は静かに頭を下げてから、不意に窓のほうを見やった。それから、いちばん前の席で筆箱をがさごそとやっていた坂上康太にこう言った。

「もしかして消しゴムを捜^{さが}してる？」

「え……？ どどどどどどどうしてそれを……？」

坂上康太はいつも自信がなさそうにおどおどしていて、男子たちからよくからかわれている。この時の態度にも、男子たち数名がクスクス笑っていた。

でも、そんな坂上に対して、黒木遊歩はまっすぐ優しい目を向けてにつこり微笑^{ほほえ}んだ。

「校庭の桜の木を揺らしてくるといいよ」

その一言でクラスがざわついた理由を、ぼくはわかっていた。

なぜってクラスの男子たちはよく坂上にいたずらをするから。

坂上はいじめられっ子だから、そんな光景はもう見慣れてしまった。たぶん今も筆箱の消しゴムを、こっそり誰かが窓の外へ投げたのにちがいない。

よく見ると桜の木の枝に、消しゴムが引つかかっている。

でも驚いた。筆箱の中を捜^{さが}している坂上の姿と、窓の外の桜の木に引つかかっている消しゴムを見て、それらを結び付けて考えるなんて、ふつうなら思いつかない。ぼくだったら、きつとそんな推論にはたどり着かなかっただろう。

誰かがくやしそうに舌打ちをした。坂上はプリムラに言った。

「あ、あ、ああああの……消しゴムをととと取りにいつて……」

「早く行ってこい！ もう消しゴムを投げて遊んだりするなよ！」

わかってないな。坂上が自分で投げたりするわけがないのに。そんなこともプリムラには想像がつかない。独裁的^{どくさいてき}なだけじゃなくて、想像力も足りないんだ。やれやれ。本当にプリムラが一年間担任なのか。地獄じゃん。

坂上が教室を飛び出していった。

「それじゃあ黒木、あそこがおまえの席だ」

プリムラが指さしたのは、ぼくの席の前の、誰も座っていない席だった。

教室で男子たちが顔を見合わせてクスクス笑っている。さっきの坂上の口調の真似をしたりして。

ほら、コイツらが犯人ですよ先生。

でもぼくは結局黙^{だま}っていた。ぼくはクラスでは無口だし権力もないし、腕っぶしも強くない。つまり、言うだけ自分を危険な目にさらすようなものなんだ。意気^{いき}地^じなかもしれないけど、仕方ない。

やがて、無事に消しゴムをゲットして坂上が戻ってきた。それを見てもプリムラは犯人

捜しを始めたらしい。ことなかれ主義なんだ。ろくなもんじゃない。

まあそれはともかく――ぼくはぼくの前の席に座った転校生の背中を見た。華奢^{きゃしゃ}だけど、姿勢がよくて、何よりどこかミステリアス。しかもさっきの推理力。これはとんでもない逸材が転校してきたのかもしれない。

「さあそれじゃあお待ちかねの、宿題プリントだ。初日からたっぷり出してやるぞお、喜べ！　がっはっはっは！」

豪快に笑ってプリムラは大量のプリントを次々といちばん前の席の生徒たちに配り始めた。クラス中が悲鳴を上げている。

ああ終わった。

本当にここから一年間地獄が始まるんだ。

ウソだと言ってくれ。たのむ。

黒木遊歩は振り返ると、前から回されたプリントをぼくに渡しながら「よろしくね」と微笑^{ほほえ}んだ。

「ど、どうも……」

おどおどとそう返すのがやつとだった。

内心じゃそれどころじゃなかった。

どうやったらこのプリントをやらずに済ませられる？　そんなことをずっと考えていたんだ。

「うしろまでプリントいったか？　ないところ、ちゃんと見えよ！」

プリムラの大声が教室中に響き渡る。

すると、ぼくのとりの席の昼坂^{ひるさか}ひなのが小声でささやいた。

「担任が木村なんて、わたしたち、ツイてないね」

昼坂にとつては、この転校生の存在よりも担任がイヤなやつ、ということのほうが大問題なんだろうか。まあぼくはそうだけど。まわりの女子たちはそれよりも転校生の黒木をちらちら見るのにいそがしいみたいだから、むしろ昼坂は例外という気がする。

「まったくだね」

答えながら、ぼくはちよつとうれしかった。

いま「わたしたち」って言ったの？

それってぼくと昼坂ひなのの二人を指してる？　んなわけないか。いやでもちよつとチーム感のある言い方じゃなかった？

こんなふうに舞い上がっちゃうくらいには、昼坂ひなのはかわいい。たぶんクラスの男子の半数くらいは昼坂ひなのに夢中だ。うちの学年の男子の人気は昼坂ひなのともう一人、どのクラスでも委員長に選ばれてきた真殿まどのひいろで二分にぶんしているという話だから。

つまりぼくのライバルは多い。でも、いまの言い方だと、どうやらごめん、ぼくはライバルたちにちよつと差をつけちゃったかもしれないな。そういえば、今日は欠席みたいだけれど、真殿ひいろも同じクラスか。なら、男子の興味がそっちに行ってくれば、ぼくは昼坂ひなのと……。

ついついぼくの脳みそは都合のいい展開ばかり考える。

「それじゃあクラス委員長を決めるぞー、今回はくじ引きでいく」
すると昼坂が手を挙げた。

「どうした？ 昼坂」

「毎年、クラス委員長は投票で決めています」

「ん？ ああ。まあでも、それだとどうせ真殿ひいろになっちゃうだろ？ 毎年彼女つてもつまらんだろう」

つまらないとか面白いとかじゃないんだよな、真殿ひいろには天性の委員長的な素質が

ある。だからみんな彼女を選ぶのに。何もわかってないんだなあ。

「くじ引きで、もしも増岡ますおかくんが委員長になったら、それでも先生はご自身の考えが正しかった、といえますか？」

この挑戦的な言い方に、一瞬だがプリムラがひるんだ気配があった。

「おいそれ俺に失礼だろ！」と増岡が応じる。

増岡というのは、よく言えばつねにムードメーカーで、クラスの中心人物になるタイプの男子だ。わるく言えば、単なるお調子者。

増岡のおどけた口調で、一気に笑いが起こった。

「そうだな、増岡が選ばれたらちよつと考えちゃうなあ。あれ？ しまったな。くじ引きの紙を作ったのに忘れてきたみたいだぞ」

プリムラがそんなことをぼやいていると、チャイムがちょうど鳴った。

「よし、もう帰りのチャイムが鳴ったことだし、クラス委員長は明日決めるでしょう。それじゃあ起立！ 礼！ いいか、ぜったいにプリント六枚、ぜんぶやってくるんだぞ！」

またみんなの悲鳴がこだまする。

すると、そんなさなかに昼坂がぼくに顔を近づけてこうささやいたんだ。

「あのね、ちょっとお願いがあるんだけど、放課後残れたりする？」

お願いだつて？ 昼坂ひなのが、ぼくに？

「あ、うん……も、もちろんだよ」

もちろん。そりやそうさ。昼坂ひなののたのみだよ？

最悪な一日のはずが、その瞬間に最高の一日に変わろうとしていた。

もつとも、この時のぼくはまだ気づいていなかった。昼坂ひなののたのみごとが、予想以上に厄介な出来事の始まりだったなんて。

2

ところで、放課後に誰かと教室に残ろうとしたことがあるだろうか？ あれはやつてみると思いのほかむずかしい。

まず帰り道がかぶっているクラスメイトからのいつしよに帰ろうという誘いをぜんぶ断らなきゃならないし、そのたびに「なんでだよ？」という質問をのりくらりかわさなきゃいけない。

そして最大の敵は担任だ。担任教師って教室の鍵かぎをかけて職員室に戻りたい生き物なんだ。

しかし、そこは昼坂ひなのがうまくやつてくれた。昼坂は帰りがけにプリムラにこうたずねたんだ。

「木村先生、真殿さんにプリント届けたほうがいいですよね？」

「ああそうだな。おまえ、真殿の家となりだつて？ たのめるか？」

「それが……わたしこのあとすぐに塾に行くんです。それに、真殿さん、担任が誰になるかすごく楽しみにしてました。もし先生がご都合がつくのでしたら、直接届けていただけないかな？」

「ふむ。そうだな、真殿の親御さんにもあいさつしておきたいしな。わかった、俺が行こう」
真殿ひろの親はPTAピーティーエーの会長をやっているから、ゴマをすっておきたいのだろう。まったく、どこまでも大人って考えることがきたないんだよね。

プリムラはいそいそと教室を出て行った。よしよし、邪魔者じゃまものは消えた。クラスの生徒もみんな帰った。

ふう、と二人同時にため息をついてしまった。

それから、昼坂はこう言った。

「やつと二人だけになれたね」

ちよつと刺激しげきの強すぎる言葉だよ、これは。待つてよ。ぼくにも心の準備つてもがある。これでもしも昼坂に「じつはずつと好きだったの」なんて告白でもされたら……。

ぼくの妄想力がだんだんヒートアップしてく。
すると昼坂は続けた。

「ほかでもない、君にしかたのめない、他の誰かにはたのめない」

まるでラップバトルでも仕掛けるみたいな調子で、昼坂ひなのはぼくに言った。

「ぼくでよければ何でも言うてよ」

もちろん断つたりしないよ。そう、こういう時は相手のハードルを下げてあげないと。

それにしても告白か。

生まれて初めてすぎる……なんてことを考えていたら、昼坂から思いもかけない言葉が飛び出した。

「あのね、木村先生のことなんだけど」

「うん。ん？ 木村……プリムラのこと？」

思わず声が裏返りそうになってしまった。なんでプリムラのこととぼくを放課後に残したりしたんだ？ ぼくはべつに木村のことなんかぜんぜん詳しくもなんともないのに。

「みんな恐れてることだろうけど、今年、木村先生にこのクラスを支配ろうにんぎょうされることになる。去年木村先生が受け持ったクラスの子たちの顔、覚えてる？ みんな蟬人形ろうにんぎょうみたいな無表情で、毎日つまらなそうに学校に通ってたわ。私たちもこれからそうなると思うんだよね」
「確かに、プリムラのしめつけは相当きついつて噂うわさだよ。でも、それでぼくにたのみつ

てどういうこと？ ぼくはプリムラにとくに詳しいわけではないよ？ むしろ真殿さんとかのほうが……」

「そうじゃないの」

屋坂はぼくの言葉をさえぎった。

そして、ぼくの右手を両手で握りしめた。ひんやりして柔らかな手だった。

「噂で聞いたんだけど、龍村くんってよくドローンを飛ばしてるんだよね？」

なぜそれを？ 誰が噂してるんだらう？ 学校の子たちには誰にも知られないようにしてただけだな。

「あ、うん。まあ親がときどき外で遊べつていうからね、それならドローンでも飛ばしたほうがいいかなって思ってた。撮影し



た動画をパソコンで編集して、ユーチューブにアップしたりしてるけど、それがどうしたの？」

まさかそんなぼくの趣味が屋坂の耳にまで届いているとは思わなかった。

「木村先生をドローンで撮影できない？」

「え……？ ど、どうやって？ 学校の中でドローン飛ばしたら、怒られちゃうよ」

「それはわかってる。だから、学校でじゃなくて、放課後よ。木村先生の家はこの街にある。だから彼はいつも歩いて登校してくるでしょ？」

「ああ、そういえば、そうだね」

「だからね、学校を出て家に向かう木村先生を撮影してほしいの」
「どうして？」

「今朝、少し早めに登校したときに見ちゃったんだ。木村先生が、学校の敷地の外周にかなり匂いのきつい水をまいていたの」

「え？ 匂いのきつい水を？」

「そう……何か化学薬品みたいな、人工的な匂いだった。しかも、ただまいてるんじゃない、独り言を言ってたの。『来るなよ、来るなよ』 って」

「来るなよ、来るなよ……？」

「あれは何か怪しい魔術の一種じゃないかって気がするんだよね。それに、水をまいてい
るときの木村先生の顔は、悪だくみをするみたいに笑ってたの」

「ま、まさか……そんなことは……」

「わたしも木村先生が悪さをしようとしているって決めつけているわけじゃない。だから、
それを今から確かめてほしいの。もしかしたら、帰り道でも何か怪しい行動をとるかもし
れないでしょ？」

「ぼくは彼女の言葉の意味を考えながら、ふとずっと手を握られっぱなしであることに気
づいた。急にドキドキしてきて、とつさに手を引つ込めてしまった。わあ、いまぼくは昼
坂ひなのに手を握られてしまったのか……」

慌てて次の言葉を探す。

「で、でもさ、そもそもプリムラがいつ学校から家に帰るのか、ぼくは知らないよ？」

「私も。でも、今日はわかる」

「なんで？」

「さつき、ひいろの……真殿さんの家に届け物をたのんだでしょ？　つまり、私の家の方

向へ迂回^{うかい}してから、自宅に帰ることになる。だからまっすぐ君が木村先生の家に向かえば、
君のほうが早く着ける。確か君の自宅は学校の裏手のマンションでしょ？」

「あ、うん。走れば一分で帰宅できるけど……」

「木村先生の自宅は知ってる？」

「え、なんか学校からわりと近いって噂^{うわさ}は……」

「わたし、前にたまたま見つけちゃったの。これが学校から木村先生の家までの地図」

昼坂の冷たい手が、ぼくの右手を包み、離れたときには紙が握らされていた。彼女は地
図のなかの〈学校〉を指で示した。

「今から木村先生は、真殿ひいろの家に行く」

彼女は指を南側へとスライドさせた。

そこに〈ひいろ〉と書いてある。

「真殿さんの家から西へ五分歩くと大通りに出る。そこから北へ二十メートル直進したあ
と、おにぎり屋の角を東に曲がって裏通りに入る。そこから十分ほど進んだところが木村
先生の自宅なの。つまり、ぐるっと回って学校に近い場所に戻ってくる感じ」

「なるほど。じゃあぼくはいったん家に帰ってドローンの準備をして、おにぎり屋の角あ

たりで見えないように隠れて待機していればいいわけか」

家まで走れば一分と言ったけど、全速力なら三十秒かな。確実にプリムラよりは先におにぎり屋の前に辿り着くことができる。

「でもさ、そこから十分で家に着いちやうんでしょ？ そんな十分間の追跡で、おかしいことが起こると思う？」

「今朝、わたしが見ていた数秒の間にも、〈変な水をまく〉、〈独り言をつぶやく〉、〈悪だくみをするみたいに笑う〉という三つの特別な動きをした。だったら、帰り道でも怪しい動きを見せる可能性はあると思わない？」

「んん。まあ確かに。いまは——一時三十分か……一度帰って支度してプリムラより先におにぎり屋の前、か。ギリギリだな……」

「ね。おねがい」

昼坂は、もう一度ぼくの手を握り、ウインクをした。

もうここまでされたらぼくは言うことを聞くに決まっている。昼坂ひなのためのロボットになったも同然だ。

だけど、そうは言ってもロボットにはロボットの哲学がある。

「でもさ、どうしてそこまでするの？」

そう、動機だけははつきりさせておかないとね。

すると、昼坂はこう言った。

「もしも木村先生がわるいことをしようとしているなら、許すわけにはいかないでしょ？それに、その証拠をおさえれば、それを交渉材料にして無茶な大量の宿題を出させないようにもできる」

「なるほど。それは確かに効果的かも」

ステキなアイデアに思えた。正義のため。そしてぼくらの宿題をチャラにするため。ふたつの目的が重なっているなら、動かない手はない。

それにしても、ドローンにそんな使い道があるなんて、しょうじき思いもしなかった。昼坂って頭いいんだな、とぼくは思った。

「わかった、やってみるよ」

こうして——ぼくの密偵が始まった。

「しつかし、たいへんなことを引き受けちゃったな……」

ぼくは駆け足で家に帰りながらそうつぶやいた。

ドローンで追跡か。

そんなの、やったことないな。

じつはドローンの操作はそれほどむずかしくない。でもやったことがない人からすれば、ドローンが使えるぼくはどこかの博士にでも見えるのかもしれない。

まあでもそれも無理ないよね。

パパやママの子どもの頃はラジコンが流行^{はや}ったりもしてたらしいけど、今はみんなスマホでゲームだからさ。

ラジコンが使えなきやそりやドローンはもつと難^{なん}解^{かい}なものに見えても仕方ないよ。

本当は矢印さえわかるなら、誰でも簡単にできるんだけどね。世の中不思議^{ふしぎ}なものだよ。

「なんかむずかしそう」ってイメージのおかげで「なんかすごいやつ」ができあがつちゃうんだから。

「ただいま」

玄関のドアを開けると、ランドセルを放り出して二階に上がった。

「おかえり。宿題すぐにやるのよー」

ママの声が追いかけてくる。

いつもママは先回りして宿題のことを言うんだから。ちょっとせつかちすぎるんだよな。でも今はそんなママとやり合っている暇^{ひま}はない。

「夕飯までには終わらせる！」

そう答えて、机の脇の棚に置いてあるドローンをバッグに詰め込んで家を飛び出した。もうママの声は追いかけてはこなかった。

きつと今頃、ぼくが宿題もせずに友だちの家に遊びに出かけたと思って大きなため息をついているはずだけど、そんなのどうでもいい。

向かうは学校の西側にあるおにぎり屋^{むす美}。駆け足でおよそ三分で到着。ふう。まあ、間違いなくプリムラはまだここを通っていないだろう。

その向かいには大きなマンションがあつて、そのゴミ収集所の陰がちょうどくぼみになつているから身を隠しやすい。

ぼくはくぼみにうまく身をかがめて、息をひそめて待つていた。バッグからドローンを取り出して、ちゃんと動くかテストもしておく。よし、大丈夫そうだ。

ぼくのドローンには名前がつけてある。

ファントム。意味は、幽霊^{ゆうれい}。幽霊^{ゆうれい}みたいにふわりと飛んで、音もなくゆらゆらと移動するからね。

「さあたのむぞ、初仕事だな」

ぼくはファントムを撫^なでた。マシンにだつて心はあると思うんだ。こうやつて撫^なでてやると、ちよつと機嫌がよさそうに見える。

と、そんなことをしていると、だんだん空の色が変わり始めた。さつきまで曇り空だったのに、晴れてきたんだ。

「ふう、よかったな、ファントム」

これで雨でも降つていたら、せつかくの昼坂ひなのからの依頼にこたえられないところだった。

さあ、あとは肝心の木村を待つだけ！ ぼくはポケットからチュッパチャプスを取り出して口にくわえた。

ああでも、なんだか緊張してきた。

これつて、よく考えれば（よく考えなくても）いわゆる張り込みつてやつだよな。

ドラマで探偵や刑事がよくやつてるやつ。口の中のチュッパチャプスがどんどん小さくなってくる。

早く出てきてくれよ、プリムラ。

そう思っていると、やつと木村が現れた。

がつしりした体格、黒縁の眼鏡。毛の本数に限りがあるチリチリの頭。

間違いない。遠くからでも木村を見間違えるなんてあり得ない。それにぼくは目がいいからね。といつてもすぐに尾行^{びこう}をしたりはしない。ぼくは百メートルくらいは距離をとる。

ただしドローンはべつ。

さあ、ファントム、行け！

ドローンのスイッチをオンにした。

ファントムは、まずは垂直に上空に浮かんだ。そして、かなりの高さまで上がったところ

ろから、プリムラの進むほうへとコントロールで動かした。

こいつはとっても優秀なんだ。どんなスパイや忍者よりもね。そして、それを操っているぼくはその司令塔しらいとうってところかな。

ファントムはプリムラのわずかにうしろを飛んでゆく。

人間、まさか上空からついてこられてるなんて思いもしないからね。プリムラは一度もうしを振り返ったりせず、すたすたと歩き続ける。

だけど、期待はずれにも、プリムラは何もしない。くさい水をまいたりしないし、独り言ひとりごともとくに言わない。うしろからだから、悪だくみの笑いをしているかどうかは見えないけど、少なくとも斜め上空から見ると怪しい動きはまったくない。

アニメグッズショップの前を過ぎ、ゲームセンターの前を過ぎる。このまま進めば、たぶん何もしないで帰宅してしまうんじゃないだろうか。

なんてこった。

つまらない結果になってしまった。

それにしても木村ってわりと歩くスピードが速いんだな。ぼくは背後から差し込む太陽に見守られながらドローンをゆつくり操作する。

もうこうなると、あとは住宅街を抜けて自宅に帰りつくのを待つだけだ。プロペラの回転音が聞こえるともずいから、できるだけ高い位置から追跡した。

ドローンにはカメラが搭載とうざいされている。ぼくはスマホの画面でドローンが映し出した映像を見ながらゆつくり追いかければいい。実物の木村を見ていなくても、これなら木村を見逃すことはない。

それに、さつき昼坂にもらった地図はおよそ頭に入っている。ドローンの映像を見れば、たとえ実際の木村を見失ったところで問題はない。

上から木村を見るなんてめったにないことだ。

ひとつだけ、これは昼坂に報告できるかな、というポイントを見つけた。それは、プリムラがスマホを取り出して画面を見たまま歩き出したことだ。

プリムラって自分は生徒にスマホを見ながら歩くとか言ってるくせに、めちゃくちゃスマホ見てるじゃん。ぼくらに言ってることとムジュンしてるよね。

このムジュンを内緒にする代わりに、宿題なしにしてくれないかな？　ちよつと交渉材料としてはよわいかな？

あ、もうひとつ見つけたぞ。

プリムラって頭頂部だいぶ薄くなってるんだな。毛の本数に限りがあるとは思ってたけど、まさかここまでだったとは。苦労してるんだな。これは男子あたりが喜ぶネタにはなりそう。だけど、あんまり品のない真似はしたくないな。

そんなことを考えていると、角のクリーニング屋を曲がり、そこからさらにコインランドリーの前を通り過ぎてパン屋とお惣菜屋の並びを素通りした先にある一軒家の前で木村は立ち止まった。一瞬、映像が陽光にさえぎられ、次の瞬間、プリムラはその門の中へと消えてしまった。

ふむ。今日のところは怪しいところなし、か。

まあしいて言えば、歩きスマホをしているってこと。それと、頭頂部の砂漠化疑惑かな。でもどっちもちょっと交渉材料としてはよわいよね。くさい水をまくっていうような迷惑行為までは見られなかった。

もちろん画像をスクショして「教師失格！ 歩きスマホ」とか「プリムラの頭皮が危ない！」って拡散したら、校内で少し騒ぎにはなるだろうけど、その次の瞬間には犯人探しが始まって、ぼくが怒られる羽目になるかもしれない。それはごめん。

もつと木村が言い逃れできないような、決定的な証拠をつかまないと。ああやれやれ。今日は無駄足か。

これって何日も尾行調査しなきゃいけないのかな。ドローンが自動でやってくれるようになるトラクなんだけど。

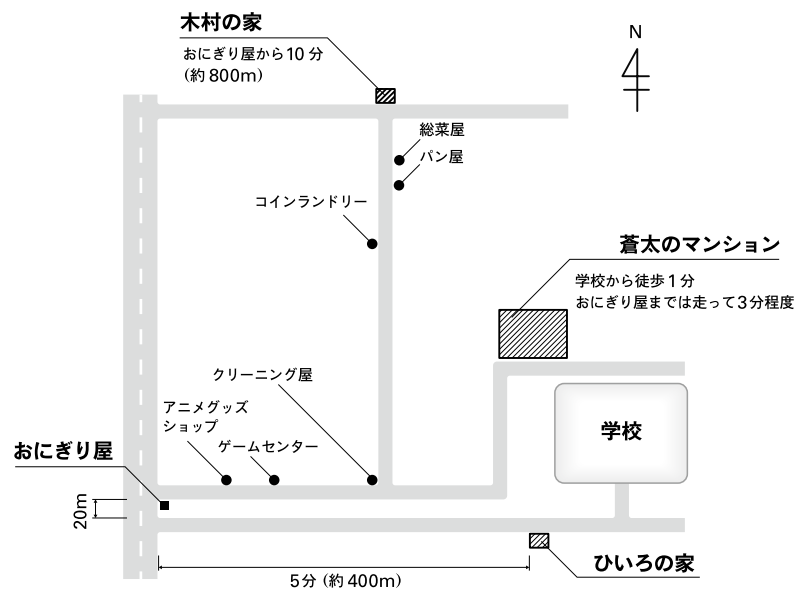
と、ちやうどそこでLINEの通知音が鳴った。

屋坂からだった。

「どう？ 尾行はうまくいってる？」

「まあね。でも期待外れだったよ。プリムラはくさい水をまいたりしなかった」

「なんだ、がっかりね」



「へそだね。でも面白かったこともあるから」
「え、なにに？」

「あとで教えるよ」

スマホをしまつて、ドローンを引き上げようとしたときだった。
家の前のゲートを捉えていたはずのドローンのカメラ画像を映し出す液晶画面の左端から、何かが横切るのが映った。

毛の本数に限りがあるチリチリの物体。

「え？ ウソ……ウソだろ？」

ぼくは自分の目がいま見たものを疑った。

そんなまさか。

だって……。

それはあまりに一瞬の出来事だった。けれど、見間違ひなんかじゃない。ぼくはその場で撮影を止めて画像を確かめた。

画面の左端から現れて、右端へと消えたそれは、自宅に帰ったはずのプリムラだったんだ。

「……あり得ない」

そう、あり得ない。

あり得ないはずのことが、起こってしまった。

これが、この事件の発端^{はつたん}だった。



第二章 ロンパ倶楽部への招待

1

帰宅すると、すぐにLINEが届いた。昼坂ひなのからだった。

「へじらさないで。面白いものって何？」

あのときは、プリムラが歩きスマホをしていたことやカツラのことを報告しようと考えていた。

「だけど、今はちがう。」

もつと特大のネタをぼくは手に入れてしまったんだ。

でも——何て言ったらいいんだ？ プリムラが二人いたんだよって？ ヘンなやつだっ
て思われちゃうよね。それか、この人自分に興味をもつてほしくてそんなウソをついてる
のねって思われる。それはイヤだよ。

でも少し迷ったあと、結局ぼくは、見たことをそのまま伝えることにした。

「いや、何か妙なものを見ちゃったんだよ」

「妙なもの？ 頭髮が薄いとか？」

「それもたぶんそうかなって思うけど」

「それだったらもう女子はみんな知ってるよ」

「え、そうなの？」

最新のネタかと思ったんだけどな。

「ついでに言っと、木村先生は前に自分でネタにしたことあるから、大したよわみには
ならないと思う」

「そうなんだ……」

ぜんぜん知らなかった。

「あ、でも、そんなレベルじゃないんだ」

言おう。言うしかない。

〈つまり、頭髮よりもすごいこと？〉

〈うん〉

確かに、頭髮よりもすごい。ただし、信じられないレベルで。

〈それは朗報ね。教えて〉

ローホー？　どういう意味だろう？　ときどき昼坂つてむずかしい言葉を使う。

〈こんなこと聞いてもヘンに思わないでほしいんだけど〉

〈思わない。約束する〉

本当かな。でも今はこの約束を信じるしかない。

〈プリムラが二人いたんだよ〉

送信してから、十秒間の沈黙。

既読の文字だけが、なんだか静かにぼくを見返しているような気がした。

ああやつちやつた……やつぱり言わなきゃよかったんだ……。

大いなる後悔がすぐに押し寄せてきた。

それから、やつと返信がきた。

〈ごめんちよつと何言ってるのかわからない〉

想定していた最悪な回答〈頭おかしいんじゃないの？〉よりは数段マシな返事だった。

とはいえ、この先の答え方ひとつでは結局最悪な回答を引き出すことになりかねない。こ

こは慎重しんちょうにいかないとね。

〈だよね。でも本当なんだ。これ見て〉

ぼくは動画をちようどいいサイズに切り取って送信した。

一分後、昼坂から返信があつた。

〈何これ。え、合成？〉

そりやそう思うに決まってるか。これは仕方ないこと。

〈ちがうちがう。本当にそいうのが撮れちゃったんだ〉

〈それを私に信じろと？〉

〈信じてもらうしかないよ。だってそれは実際に起こったことなんだからさ〉

〈ふうん、なるほど〉

それから、しばらくのあいだ返事が来なかった。

疑ってるのかな？　そりやあそうか。

プリムラが二人いるなんて、おかしい話すぎるもん。でもやっぱり映像で見せられると、言葉で説明するよりだいぶ説得力はあると思うんだよね。

とにかくぼくは次の返事を待つことにした。

すると——予想外の言葉がかえってきた。

「とりあえずこれ、クラスのグループプレーNに送ってみない？」

「これを？」

「そう。だって、本当なんでしょ？」

「まあそうだけど……みんなどう思うかな？」

昼坂ひなのはクラスの中でも三本の指に入るくらいかしこい。そんな彼女だってまだ完全に信じていないのに、ほかの連中がこの怪奇現象かいきげんしょうの映像を見て簡単に納得してくれるとは思えなかった。

むしろ、ぼくが怪しいやつという印象をもたれて終わる可能性は高いんじゃないのかな。だけど昼坂は続ける。

「私の目的はふたつ。木村先生がわるいことをしようとしているなら、それを阻むこと。そして、クラスが自由な状態を保つこと」

「うん、それはぼくも同じだけど」

「とくに風通しのいいクラスは大事」

「同感」

「この動画が交渉材料になるかどうか、多数決をとろうと思う」

「多数決を？」

「そう。木村先生は学校のまわりにヘンな匂いの水をまき、しかも二人いる。ね？ どう考えても何かよくないことが起こっている気がしない？」

だから、それを多数決で決めるのか。まあ確かに本来の目的を考えれば、ズレてはいないけど——。

「へん、あまり賛同できないけどな」

「なぜ？」

「きつとみんな信じないから」

そうなんだよな。そもそも、なんでこんなトンデモ映像がとれちゃったんだ？

そして、なんでぼくはそれを考えなしに昼坂に見せたりしちゃったんだろ？

ぼくは自分の浅はかさを呪のろうしかなかった。

立ち読みサンプル はここまで

「でも本当なんですよ？ 本当のことなら、それは信じるしかないんじゃない？ さっき自分で言ったでしょ？」

「そっただけだよ……」

「龍村くんって、五年のグループLINEには入ってた？」

五年生は三クラスある。たった三クラスしかないから、あるとき誰かが言い出して学年のグループLINEが作られた。

「一応ね」

宿題のわからない問題を教えてほしいから、と一年前にわりと強制的に入らされたのだ。おかげで、男子たちのくだらないやりとりが毎日流れてくるようになった。

「わかった。投稿してみよう」

そう言ったものの、内心では不安だった。みんなこんな動画を、ふだんクラスであまり発言することもないぼくが突然送り付けたらなんて言うかな？ やっぱコイツヘンなやつなんだって、そう思うんじゃないだろうか？

ぼくは恐る恐る動画を送信した。

すぐに既読はいっぱいつく。

だけど、誰も何も言い出さない。世の中、集団による既読スルーほど怖いものってないよ。

何か言葉で説明しようかな。

ちがうだよ、これはそういう意味じゃなくて……って？ いやいやおかしいよな。そういう意味じゃなくてどういう意味なんだよ？ この動画はプリムラが二人いる以外に意味のとりようがないじゃないか。

何をどう説明したらいいのかわからなかった。でもやっぱこのままはおかしいかなって考えて、「プリムラ二人いる説」とだけ書いた。書いてから、うわあよけいに怪しいやつじゃん、という気がしてきた。

しばらくしてから一件だけコメントがついた。

クラスの柴田紘一しばたこういちだった。スポーツ万能、クールでちよつとサバサバしたところがあつて、女子からの人気も高い。

「つまんね」

おい！ つまらんってなんだよ？ 柴田はもともと単刀直入にものを言うタイプではある。でもそういうことじゃないだろ！ これはジョークなんかじゃないんだから！